

verbum substantivum と significatio

柏木英彦

1. プリスキアヌスが *ὑπαρκτικὸν ῥῆμα* に *verbum substantivum* というラテン語を当てたことは、⁽¹⁾ 文法学が言語論理学的性格をおびる十一世紀後半から十二世紀前半にかけて、一つの論点を提供することになった。かつて R. ハントが紹介した著者未詳の古写本 *Glose super Priscianum maiorem* は、プリスキアヌスによる動詞の定義に含まれる能動、受動を表わさない *verbum substantivum* をいかにして動詞とみなしうるかという問を端初に、動詞 *esse* の意味作用をめぐって異なる見解のあったことを示している。*substantivum* としての機能と、*verbum* としての機能をそなえた *esse* がどういう *actio* 作用をもつかという問題は、具体的には、本来存在を指し示す動詞が繫辞として使われる場合をどのように説明すべきかというかたちで論ぜられた。*esse* は *vis substantivi* によって何かを存在において示し、*vis verbi* によって *copulare* 結びつけるという機能をもつ。*homo est animal* では、人間であるところのものが動物であるところのものであることを意味する。が、個性が基体について言表される場合には、多義的に述語されることになる。*Socrates est albus* において、述語される *albedo* 白さに注目してみると、*est* は二つの機能のいずれによっても、ソクラテスと本性を異にするものをソクラテスに結びつけることはできない。このもの(ソクラテス)があのも(白さ)であるとは言えないからである。そこで、この写本の著者は、*est* の述語的機能からすれば、白さがソクラテスに内属する (*inhaerere*) ことを意味し、*substantivum* としての機能からすれば、ソクラテスは白いもの、白い身体であることを意味するというふうに解決をはかっている。⁽³⁾ R. ハントによれば、当時のプリスキアヌス註

積家が動詞の機能に内属の概念を加えたのは、名詞との区別のためであった。⁽⁴⁾ 名詞にも能動と受動の意味作用があり、それは動詞のみの特徴ではない。しかし動詞はたんに能動とか行為する人とかを示すのではなく、能動が行為する人に内在することを意味するのにたいし、名詞は端的にそれ自体として考えられた能動を意味する。つまり動詞はある特定の人に能動が内属することを意味するという点で名詞と異なる。

2. 十二世紀の著名な文法学者ベトルス・ヘリアスの『プリスキアヌス文法大全』も、またソールズベリのヨハネスがシャルトルのベルナルドゥス以後の秀抜の文法学者と評した⁽⁵⁾ コンシユのギョームの『プリスキアヌス註釈』も、その重要性が指摘されながら、いまだに刊本を見ない。さらに、この両者がかなり影響を受けたと言われる⁽⁶⁾ アベラルの『文法』は散佚して伝存しない。とすれば L. レイクや E. ジョノーの紹介によって⁽⁷⁾ 推知しうる面があるにしても、当時の文法学の実情について精確なところは判らないことになるが、verbum substantivum についてはアベラルが論理学書で論及しており、しかも独自の展開を見せているので、以下その要点をノート⁽⁸⁾ する。

彼は「Logica 'ingredientibus」では内属論をとるが、「Dialectica」では同一性論⁽⁹⁾ に傾く。verbum substantivum は何であれ存在において表意するのであるから、存在を結びつける (conjunctio essentiae) 機能がある。Socrates est albus において、albus は主語に二様に結びつけられる。一つは albedo in adiacentia すなわち偶性的に付け加わる白さであり、一つは albus in essentia つまり白さによって存在する白いものである。ところで結びつけられるものがすべて述語されるのではなく、命題によって結びつけようと意図されるものが述語される。したがって命題は、白さがソクラテスに内属することを示している⁽¹⁰⁾。一方、同一性論によれば、主語と述語が同一のものを指し示す、言いかえれば、同一のものの名であり、同一のものにおいて述語の意味内容が主語の中に見出されるのであって、est によって主語と別の実体が示されるのではない。主語と述語は intransitive に結びつけ⁽¹¹⁾ られている。intransitive とは、プリスキアヌスによれば、たとえば legens doceo のごとく、或るものが他のものへ移行しない結合のことである⁽¹²⁾。

3. 動詞によって第一義的には、存在が述語される。Socrates currit はソクラテ

スが走る者の一人であることを意味し、存在の述語化すなわち走ることの基体たるものの存在が示される。同様に *Socrates est* はソクラテスが存在する者の一人であることを意味する。このように本来的に使われる場合、動詞は結合の機能のみでなく、述語されるものの意味内容 (significatio) をももつ⁽¹⁴⁾。ところが *Socrates est homo*のごとく、*tertium adiacens* として非本来的に述語される場合、述語されるものを結合するのみで、述語されるものを含まない。*homo* は命題において余計に置かれているのである。

もし繫辞としての *est* に存在指示機能があるとすると、存在しないものを主語とする命題は、構文として正しくとも、述語作用には矛盾が生ずる。たとえば *Chimera est opinabilis vel non existens* で、現に存在しないキマイラが動詞 *est* の存在指示機能によって存在することになる一方、述語の意味内容に基づいて存在しないことになるという矛盾に陥る。したがってこういう場合、主語の存在は推論できない。繫辞に存在指示機能を認めると、*est ens (existens)* を意味するから、*S est ens* という文では、*ens* は *est* の中に含まれているので、余計な述語であり、あたかも *S est ens ens* と言うがごときこと⁽¹⁵⁾になる。現在は存在しないものを主語とする命題 *Homerus est poeta* について、師の⁽¹⁶⁾見解として紹介している解釈、すなわちホメロスの名声が詩を通じて現に残っているというふうに文全体を比喩的表現ととる解釈にアペラールはとどまらない。

4. 動詞が結合機能のみでなく存在指示機能をもつべくつくれたとすれば、繫辞を含めて非本来的言表はいかにして存在を含意しうるかという疑問から、アペラールは肯定命題を主語、述語、繫辞の三部分に分けるのではなく、繫辞と述語を一つの述辞とみて、二部分から成るとする考え方を提案する⁽¹⁷⁾。つまり *est albus* あるいは *est opinabilis* を一つの述辞と見なすのである。*iste erit sedens* において *sedens* なる現在分詞は、現在座っていることから命名されたのであるから、*erit unum de his que presentaliter sessionem habet* の意味である。したがって *erit* と *sedens* が別々に固有の意味内容を保持するとすれば、まだ座っていない人について、この命題は誤りとなる。*erit sedens* を一つの述辞ととらないかぎり、未来⁽¹⁸⁾についての陳述となりえない。繫辞は述辞の一部を成し、また現在の意味をもつ述語はそれのみで主語についての言表ではなく、未来あるいは過去の繫辞と一つの述

辞を成すという考え方からすれば、est poeta の場合、esse poeta という一つの事態を指し示すことになる。こういう説はアベラールが初めて提示したもののようである。⁽¹⁹⁾

5. プリスキアヌスの動詞の定義には、むろん時の指示作用が含まれているが、アベラールは「Dialectica」において名詞も時を指示すると主張する。⁽²⁰⁾ currit は或る人に現在、走ることが内属すること、est currens を意味する。albi は基体に albedo が現在内属するかぎり名詞である。現在内属するという点で動詞と名詞は異ならない。vivi も vivens も時に関して意味作用は同一である。vivi はかつてそうであったからではなく、現在そうであるから vivi と言われるので、名詞は現在という時を consignificare 共に意味する。名詞と動詞は時の指示の有無によってではなく、時の指示の仕方、意味作用の様態において(in modo significandi)異なる。動詞は基体たる人に関して内属を時において示すという仕方では示すが、名詞はそうではない。album は albedo を adiacens, inhaerens として意味するが、付け加わること、内属することを動詞のようには示さない。

ところで「動詞はとりわけ述語となるために、名詞は主語となるためにつくられた⁽²¹⁾」という一句は、命題における機能による区別を述べたものと言えるが、K. ヤコビは先の albi という名詞が現在を意味するということは、この観点から理解されると解する。すなわち述語の位置におかれた est albus を一つの述辞として捉えるときにのみ、基体に内属すること、したがって現在を意味する、つまり述語の位置におかれた場合にのみ、現在を意味する。

名詞と動詞の構造は異なるが、同じことをいずれによっても表わしうる。currit と currens に意味の相異はない。相異はどこにあるかと言えば、「語類の区別はものの相異によるのではなく、⁽²³⁾知解による。」捉え方が異なれば知解作用も異なる、つまるところ意味作用の様態の相異に帰着する。「ものと概念の意味作用のほか命題の意味作用 (significatio) がなければ、Socrates currit と Socrates currens との意味 (sensus) にいかなる相異もない。⁽²⁴⁾」ここに語ないし概念の意味作用と異なるもう一つの意味作用の次元、語が命題におかれたとき別の意味作用の生ずることが、はっきり主張されている。では語が命題におかれたときどういう意味作用をもつのか、命題はそもそも何を指し示すのか。

6. 命題は名辞と違って、ものそのものを示さない、あるいは端的にものを示すの
 ではない。⁽²⁵⁾ 肯定するにせよ、否定するにせよ、命題は何かを主張するが、それは端
 的⁽²⁶⁾なものではなく、物が相互にいかなる関係にあるかという事態である。いわばも
 のの在り様が表わされるのであって、もの (res) が示されるのではない。命題は
 もの⁽²⁷⁾と関連をもち、もの⁽²⁸⁾の知解を表わすにしても、本来の意味でのものを意味しな
 い。命題の意味すること、たとえば人間は動物であるということは存在 (essentia)
 に属していない、それは quasi res ⁽²⁹⁾である。

ところが他の箇所⁽²⁹⁾で、命題により肯定されたり否定されたりするのは、ものの存
 在 (essentia rerum) であると言われる。これはどう解すべきか。アベラールは命
 題には概念と異なる意味作用があることを説明するさい、命題における帰結の必然
 性をとりあげる。必然性は存在にも知解作用にも認めがたい、両者とも移りゆくも
 のだからである。「バラがあれば花がある」という場合、帰結の必然性は意味作用
 に求められる。⁽³⁰⁾ものが消滅しても、意味作用には必然性が認められる。必然性はも
 の⁽³¹⁾のともとの関係でもなく、作用としての知解の関係でもなく、知解内容の形式的
 関係であり、論理的事態である。命題はもの⁽³¹⁾と関連をもつが、その意味作用は直接
 存在の次元に属さず、もの⁽³²⁾の相互の関連ないし事態を意味するという点で、意味作
 用の対象は quasi res と言われ、essentia rerum と呼ばれる。つまり命題の意味
 する essentia は端的に res existens ではない。L. レイクはこの点について、
 loqui が前置詞をとらずに使われていることに注意を喚起する。⁽³²⁾「ipsam essentiam
 quam simplex loquitur propositio」⁽³³⁾において loqui が前置詞 de とともに使われ
 ていれば、命題はすでに存在する所与について語ることになるが、ここはそうな
 っていない。したがってここは、命題の意味作用とともに或る事態がそこにたてられ
 るという意味である。レイクはさらに命題の意味作用について述べた次の一節を引
 くが、校訂者 B. ガイヤーの使用したミラノ写本のほかにベルリン写本も利用して
 重要な訂正を行っている。⁽³⁴⁾下線は読み改められた箇所、括弧内はレイクの読みを示
 す。……cum propositiones dicta sua proponendo (ponendo) significant, non
 tamen illae (de eis) intellectus constituunt. Nam nomina et verba vel oratio-
 nes intellectus suos significant, non tamen intellectus (de eis) alios iterum
 intellectus constituunt. Sic et propositiones dicta sua proponunt et intellectus

compositos ex illis (intellectibus) partium constituunt. Unde oportet <per>
propositiones non dicta intelligi, sed res in intellectu(vi intellectus) complecti.

このように読み改めれば、テキストの意味のみでなく、命題の意味作用がより明瞭になろう。

アベラールは「ものと知解（概念）のほかに第三に名辞の意味作用が生ずる」⁽³⁶⁾と述べたあと、この考え方は権威にも理性にも反しないと付け加えているところからすると、ものと概念という二項でなく、言語の意味作用という第三の次元を別にたてるのは独自の視点であることを宣明したものと見てよいであろう。命題の意味作用は語のそれに比して、ものの世界からより独立しているので、この主張はとりわけ命題に妥当する。J. ジョリヴェはアベラールの言語観を要約するものとして、言語は最初観念を有しなかった实在関連を明らかにしようと敷衍する。⁽³⁷⁾ものの関連にせよ、こととの関連にせよ、命題における語の結合によって新たな意味作用が生じ、事象の関連が新たに捉えられるとすれば、この点で言語は固有の世界を拓くという考え方がアベラールに見られると言えないこともないが、いまは立ち入らない。なお、いわゆる〈普遍〉の問題も上述の視点から洗いなおしてみる必要があると思うが、紙幅の関係もあることゆえ、他の機会に譲る。

註

- (1) Priscianus, *Institutiones grammaticae*, VIII, 51, ed. M. Hertz, p. 414 ; C. Thurot, *Notices et extraits de divers manuscrits latins pour servir à l'histoire des doctrines grammaticales au moyen âge*, 1868, p. 178. (reprint, 1964)
- (2) R. W. Hunt, "Studies on Priscian in the Eleventh and Twelfth Centuries, I," : in, *Medieval and Renaissance Studies*, I (1941~43), p. 194~231. 後に論集 *The History of Grammar in the Middle Ages*, 1980. に収録。
- (3) *ibid.*, p. 34.
- (4) *ibid.*, p. 25.
- (5) Joannes Saresberiensis, *Metalogicon*, I, 5, ed. C. Webb, 1929, p. 16~17.
- (6) L. de Rijk, *Logica modernorum*, vol. II~1, 1967, p. 106.

- (7) *ibid.*; E. Jauneau, "Deux réductions des gloses de Guillaume de Conches sur Priscien" in ; *Lectio philosophorum*, 1973. p. 335~370.; K. M. Fredborg, "The Dependence of Petrus Helias' Summa super Priscianum on William of Conches' Glose super Priscianum," in : *Cahiers de l'institut du moyen âge grec et latin*, 11 (1973), p. 1~57.
- (8) 本稿作成にあたり次の論攷に負うところが大きい。K. Jacobi, "Diskussion über Prädikationstheorie in den logischen Schriften des Petrus Abaelardus," in : *Petrus Abaelardus, Person, Werk und Wirkung*, hrsg. R. Thomas, 1980, S. 165~179.
- (9) L. de Rijk, *op. cit.*, p. 106 ; 「Logica 'ingredientibus」 (以下 LI と略記) in : *Beiträge zur Geschichte der Philosophie und Theologie des Mittelalters*, Bd. XXI.; 「Dialectica」 (以下 DL と略記), ed. L. de Rijk, 1956.
- (10) LI. 360.
- (11) DL. 159 ; 166.
- (12) Priscianus, *op. cit.*, XI, 11. p. 255.
- (13) DL. 132.
- (14) *ibid.*, 134.
- (15) *ibid.*, 162.
- (16) *ibid.*, 135~136 ; 168. 校訂者レイクは「師」はシャンポーのギョームではないかと推測。
- (17) *ibid.*, 161 ; 138. pro uno verbo ; 170, verbum cum adiuncto predicato unum componere verbum.
- (18) *ibid.*, 139.
- (19) J. Pinborg, *Logik und Semantik im Mittelalter*, 1972, S. 55 ; Jacobi, *op. cit.*, S. 171.
- (20) DL. 122~123.
- (21) LI. 352.
- (22) K. Jacobi, *op. cit.*, S. 173.
- (23) LI. 308.
- (24) *ibid.*, 366~367.
- (25) DL. 160, Iam enim profecto nomina oportet esse, si res designarent ipsas ac ponerent propositiones.....Non itaque propositiones res aliquas designant simpliciter quemadmodum nomina.
- (26) *ibid.* qualiter sese ad invicem habent.
- (27) LI. 365.

- (28) *ibid.* 367 ; 443.
- (29) DL. 390.
- (30) LI. 366.
- (31) L. de Rijk, La signification de la proposition chez Abélard, in : *Pierre Abélard, Pierre le Vénérable*, 1975, p. 551.
- (32) *ibid.* 554.
- (33) DL. 205.
- (34) L. de Rijk, *op. cit.*, p. 552.
- (35) LI. 370.
- (36) LI. 25. Praeter rem et intellectum tertia exiit nominum significatio.
- (37) J. Jolivet, Comparaison des théories du langage chez Abélard et chez les nominalistes du XIV^e siècle, in : *Peter Abelard*, ed. E. Buytaert, 1974, p. 174~175.